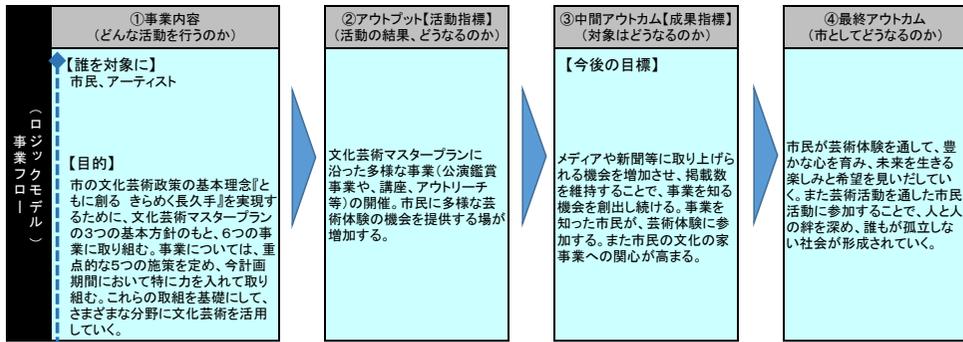


長久手市行政評価票 (A票: 事業評価票)

事業番号	22	事業名	文化の家企画事業	担当部課	くらし文化部生涯学習課
基本情報	第6次総合計画・基本目標	5 いつでも どこでも 誰とでも 広がる交流の輪			
	行政改革指針・重点課題	7 市民参加の仕組みづくり			
	法定受託事務の有無	無	決算書 ページ	—	
	その他(関係計画、要綱等)	有	会計区分	一般会計	
	事業開始の背景、経緯等	本日は、歴史の中で培われ継承・発展してきた風土や伝統文化を持ち、近隣を含め、大学が多数存在し、地域には学生や芸術家、専門家が多数在住している。地域の特性と市民一人ひとりの個性を活かしつつ、人々が協力して新たな魅力ある文化芸術の創造を図る。豊かな地域社会が織りなす質の高い生活空間を創出することにより、市民がゆとりと潤いに満ち、生き生きと暮らしを営んでいるまちを目指す。			
市民・民間事業者との連携協働の可能性	両者と協働可 (両者と協働不可の場合はその理由)				



コスト推移	項目	単位	区分	R1年度(2019)	R2年度(2020)	R3年度(2021)	R4年度(2022)	R5年度(2023)
	事業費(A)	千円	予算	44,020	40,288	35,431	38,003	38,106
			決算	33,091	21,925	24,031	35,078	-
	人件費(B)	千円	決算	37,018	27,600	32,517	35,693	-
	総コスト(C)=(A+B)	千円	決算	70,109	49,525	56,548	70,771	-
事業対象の数(D)(R5年度は想定数)	人		37,044	5,152	23,356	30,000	37,000	
対象あたりコスト(C/D)の過去3年平均値	千円		2	5	5	5		

進捗状況	中間アウトカム【成果指標】の数値設定(事業の意図を反映する指標)	単位	【現状】R4年度(2022)年実績	【目標①】R6年度(2024)年実績	【目標②】R8年度(2026)年実績
	新聞等への掲載回数(指標の設定根拠)	回	52	44	58

(数値目標の根拠: 調査名、調査年など出典)
 ・算出方法: 掲載状況の調査によって、クリップング(切り抜き)を行い、1年単位で総数を算出する。
 ・数値目標の根拠: 新聞掲載の対象となる公演数が毎年約50事業あり、各事業のプレスリリースを行っている。少なくとも1事業一社に掲載されることを目標としている。

振り返り	事業開始からの経緯など	文化の家は1998年の開館以来「人々が集い憩う、市民全体の「家」となってもらい」「市民にとって芸術文化活動を展開し、地域の文化を発信する「わが家」を感じるような親しみ深い施設になってほしい」という願いのもとに開館当初から策定された文化芸術マスタープランに基づき事業を企画、展開させてきた。(活動のエピソード、コメント、特記事項など)
	令和4年度の成果	コロナ禍以降、来場者が落ち込んでいたが、令和4年度は、一定の集客を取り戻すことができた。
	改善ポイント	(改善が必要なこと、改善の方法など) 広報が行き届かず、事業終了後に開催を知ったなどという声をいただいたため、広報手段に課題を残している。

今後	今後の方向性	(事業の成果を高めるための事業の方向性) 長久手市文化の家の事業の内容、クオリティは非常に高く、オリジナル公演を多数創出して、アーティストとの協働も実現している。しかしながらこの価値の大きな公演への来場者数については、まだ集客は可能と思われる。このため、広い世代にアプローチができるように、SNSや、若い世代に通用する方法による広報手段を取り入れ、さらなる集客へとつなげていく。令和8年度までに文化の家LINE登録者数1000人を目指してPRしていく。また長久手市が抱える課題に対して、文化芸術をうまく活用した事業を他課と連携して開催しアプローチを行っていく。
----	--------	---

事業を構成する事務事業①	事務事業①	芸術鑑賞事業							
	活動指標(事務事業の具体的な活動の指標)	単位	区分	R4年度(2022)	R5年度(2023)	R6年度(2024)	R7年度(2025)	R8年度(2026)	
	(1) 運営に携わる市民の人数(文化の家フレンズスタッフの人数)	人	見込	30	30	35	40	45	
			実績	28					
	(2) 【アクションプラン】文化の家の学校の鑑賞会開催回数	回	見込	2	2	2	2	2	
		実績	1						
		見込							
		実績							
<備考: 活動の概要(R4年度(2022))> 文化芸術マスタープランに基づきさまざまな事業を計画し、積極的な事業展開を行った。コロナ禍での来場者減少の影響は完全に回復していないが、それでも着実に来場者は増え、コロナ禍以前の劇場の賑わいを取り戻しはじめた1年となった。学校鑑賞会には東京大学先端科学技術研究センター特任教授のヴァイオリニスト近藤薫氏を迎え、小学生に非常に質の高い演奏を体験してもらうことができた1回の実施に留まった。								今後の方向性	改善・見直し
								コスト投入	現状維持

事業を構成する事務事業②	事務事業②	アートスクール事業							
	活動指標(事務事業の具体的な活動の指標)	単位	区分	R4年度(2022)	R5年度(2023)	R6年度(2024)	R7年度(2025)	R8年度(2026)	
	(1) 運営に携わる市民の人数(市内在住講師の人数)	人	見込	5	5	5	5	5	
			実績	2					
	(2) 【アクションプラン】新規受講人数	人	見込	100	100	100	100	100	
		実績	42						
(3) 受講率	%	見込	100	100	100	100	100		
		実績	66						
<備考: 活動の概要(R4年度(2022))> 新型コロナウイルス感染症に係る規制等が緩和され、受講率がR3年度の52%から一定数回復した。R5年度から講座内容を一新するため、R4年度に講座内容・開催時間・講座数・対象年齢等の検討を行った。								今後の方向性	改善・見直し
								コスト投入	現状維持

事業を構成する事務事業②	事務事業②	文化芸術アウトリーチ事業							
	活動指標(事務事業の具体的な活動の指標)	単位	区分	R4年度(2022)	R5年度(2023)	R6年度(2024)	R7年度(2025)	R8年度(2026)	
	(1) 運営に携わる市民の人数(市内在住・在学のアウトリーチ出演アーティストの人数)	人	見込	5	5	5	5	5	
			実績	4					
	(2) 【アクションプラン】体験型の活動数	回	見込	6	6	6	6	6	
		実績	1						
		見込							
		実績							
<備考: 活動の概要(R4年度(2022))> コロナ禍も緩和が進み、中学校については全3校、小学校は6校でアウトリーチを行うことができた。活動した会場は教室、体育館、武道場等で学校により様々であったが、その他にも交流を深めるために放送室、映像配信等、学校側と協力・工夫して交流を深めることができた。								今後の方向性	改善・見直し
								コスト投入	現状維持

事業を構成する事務事業②	事務事業②	市民企画支援事業							
	活動指標 (事務事業の具体的な活動の指標)	単位	区分	R4年度 (2022)	R5年度 (2023)	R6年度 (2024)	R7年度 (2025)	R8年度 (2026)	
	(1) 運営に携わる市民の人数 (シネマ倶楽部人数・フレンズ会員数)	人	見込	300	300	300	300	300	
			実績	158					
	(2) 【アクションプラン】事業数	人	見込	2	2	2	2	2	
			実績	2					
	(3)		見込						
			実績						
	<備考:活動の概要(R4年度(2022))>						今後の方向性	改善・見直し	
	団体が自主的に市民企画を担うシネマ倶楽部は、月1回の無料上映と2回の有料公演を行い、コロナ対策として定員を半数(80名→40名)にして行った。また、市民の実行委員会で運営される吹奏楽フェスティバルを無観客オンライン配信で行った。						コスト投入	現状維持	

事業を構成する事務事業②	事務事業②	アートのまちフェスティバル事業							
	活動指標 (事務事業の具体的な活動の指標)	単位	区分	R4年度 (2022)	R5年度 (2023)	R6年度 (2024)	R7年度 (2025)	R8年度 (2026)	
	(1) 運営に携わる市民の人数 (ながくてアートフェスティバル実行委員の人数)	人	見込	10	10	10	10	10	
			実績	7					
	(2) 【アクションプラン】アートのまちフェスティバル事業来場者数	人	見込	2,000	18,000	500	18,000	500	
			実績	1,922					
	(3)		見込						
			実績						
	<備考:活動の概要(R4年度(2022))>						今後の方向性	改善・見直し	
	ながくてアートフェスティバルは市が主体となって開催してきたが、令和4年度は実行委員会が単独で市内各所を会場として開催することができた。実行委員会が自分たちで開催できるだけの力が育ってきている。令和4年度の来場者数は実行委員会単独の開催であり、市として事業を実施していないため、計上されていない。令和4年度の来場者数は、ながくてアートフェスティバルとは別に開催した国際芸術祭ポップアップの来場者数を記載している。なお、市が主催のながくてアートフェスティバルは隔年で開催していくこととなっている。(市主催でないときは実行委員会の単独開催)						コスト投入	現状維持	

事業を構成する事務事業②	事務事業②	創造スタッフ創造活動事業							
	活動指標 (事務事業の具体的な活動の指標)	単位	区分	R4年度 (2022)	R5年度 (2023)	R6年度 (2024)	R7年度 (2025)	R8年度 (2026)	
	(1) 創造スタッフ事業への 市内在住者の参加者数	%	見込	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	
			実績	1,131					
	(2) 【アクションプラン】創造スタッフによるオリジナル事業の数	回	見込	10	10	10	10	10	
			実績	9					
	(3)		見込						
			実績						
	<備考:活動の概要(R4年度(2022))>						今後の方向性	改善・見直し	
	6人の創造スタッフがそれぞれの専門性を生かし、様々な事業を開催することができた。特に創造スタッフ劇場「NEON」では6人の総力を結集した、完全オリジナルのステージを完成させ、開催当日は大雪に見舞われたものの、開演時間を遅らせることで無事に開催することができた。集客についてはまだまだ増加させたい。						コスト投入	現状維持	